



Title	大江健三郎『飼育』を読む
Author(s)	出原, 隆俊
Citation	語文. 2022, 119, p. 40-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95246
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大江健三郎『飼育』を読む

—

次の箇所は『飼育』（『大江健三郎自選短篇』（p102～p165）に所収下、ページ数を表示した場合はこれによる）の展開についてきわめて重要であるが、そのことを論じる前に、〈語り〉の問題から考察を始めた。

ぼくはもう子供ではない、という考えが啓示のように僕をみたした。（p162）

この「啓示」という言葉を使えるのは、当然、ある年齢に達したものである。ここでは、「ぼく」と「僕」の使い分けに注意したい。前者はそう思った時の「ぼく」の〈生〉の言葉として〈再現〉されたものとしてあり、後者はその時の状況を語る「僕」が用いている。『セブンティーン』では主人公は皇道派の演説を「啓示の声」と扱っている。他の用例も見てみよう。

空は濃い菫色をしてゐた。此の季節のこの色は秋のやうに透

出 原 隆 俊

き通つてはゐない。私の想像はその色が暗示する測り知れない深みへのぼつて行つた。そのとたん私は心に鈍い衝撃を受けた。さきの疑惑が破れ、ある啓示が私を通り抜けたのを感じた。

闇だ！ 闇だ！ この光りに横溢した空間はまやかした。（梶井基次郎『闇への書』、引用は、ちくま文庫）

僕はあなたに返事を出さないことに決めました。だって不完全な手紙を出すくらいなら、（略）しかし今朝、僕は36の偶然の集積を経て、一つの啓示を得たのです。つまり大いなる不完全さ、ということですよ。（村上春樹『カンガルー通信』、引用は、新潮文庫）

それぞれ、「疑惑が破れ」、「偶然の集積を経て」というような経緯で「啓示」に達したと青年期の「私」や「僕」が語るのである。

また、「黒人兵が灰褐色の絹の飛行服を着こみ髹した黒い皮の飛行靴をはくかわりに」「不格好な靴をはいていた」（p114）という

表現にしても、それを目撃した時の「僕」はその飛行靴など、まだ見たことがないはずであり、後日の「僕」の認識に基づいているはずである（ただし、同じ〈作者〉の『遅れてきた青年』には少年の「わたし」が「写真で見た七ツボタンの紺の服のかわりに黄色の作業服と洗いざらしの戦闘帽の子科練の一人」とあり、当時「写真で見」ていてその場でどのように認識した可能性は完全には否定できない）。

さらに、

柱のくぼみに歪んで暗い鏡が揺れている、僕が階段を上がるにつれて……全くとるにたりない日本人の少年が頬をひくひくさせてそこへ浮かびあがつて来るのだった。（p131）

とある「とるにたりない日本人」ということについても、その時の「少年」自身の捉え方ではなく、『飼育』全体を俯瞰している時点での「僕」の認識であろう（『遅れてきた青年』にも、少年の体験として、

穢らしい傷だらけの鏡に、（略）愚鈍な眼がうつって惨めにまぶしがって、（略）忌いまして腹だたしく、

とあるが、ここには「日本人」というような概念は入り込まず、「腹だたし」というその場の感情である。このことを明確にするために遠藤周作『黄色い人』（一九八〇（昭和55）年）を見よう。

最初、俺は、鏡の映像が本当に俺の躰とは思えなかった。病氣こそすれ俺は日本人としては均整のとれた裸体をもっていた。背も毛唐なみに高いが、胸幅、四肢とも恥ずかしくない

肉がついている。肉体の形からいえば、俺は白人の女をだいて不調和な姿態をとる筈はなかった。

だが、鏡にうつったのは、それとは別のものであった。部屋に灯に真白に光った女の肩や乳房の輝きの横で、俺の肉体は生気のない、暗黄色をおびて沈んでいた。（略）そして女と俺との躰がもつれ合う二つの色には一片の美、一つの調和もなかった。むしろ、それは醜悪だった。俺はそこに真白な葩にしがみついた黄土色の地虫を連想した。

ここは、日本人にとつてのキリスト教というテーマに拘泥してきた遠藤の、白人と黄色人種の問題にかかわる見過ごせない箇所である。『飼育』で「日本人」という言葉を持ち出すには、語る「僕」にとつてはそれだけの必然性があったということであろう。鏡については次のようなことも視野に入れておきたい。

彼ははつとして、眼を据えた。然しそれは洗面所の横に懸けられた大きな鏡に映る自分の影像に過ぎなかった。（略）何時もと違った不満足な印象が鏡の中に現はれた時に、彼は少し驚ろいた。是が自分だと認定する前に、是は自分の幽霊だといふ氣が先づ彼の心を襲った。（夏目漱石『明暗』、引用は、『漱石全集』岩波書店、一九九四年）

「明暗」の津田は妻のお延には真意を伏せて、過去に関わりのあった女性に会うために、その人が宿泊する宿に自分も泊まる。過去に自分の前から姿を消した女性の事情をそのようにしてまで掴んで自分を納得させたい「自分」を不安定な存在として捉えて

いる。『飼育』では子供の時点での感覚を捉えなおして今の「僕」の認識を語っているのではないか。こうしたことと同じようなことは次のことからもうかがえる。

・黒人兵は地下倉の汗をふきだす床に寝ころび、低く太い声で不思議に生なましく僕らをとりえる歌、嘆きと叫びが底にうづくまって僕らにおそいかかろうとする歌をうたっていた。

(p143)

・翌朝、僕と弟と兎唇は降り続く雨を避けて倉庫の壁ぞいに食物を運んだ。食事のあと、暗い地下倉で黒人兵は膝をかかえこみ低く歌をうたった。僕らは明りとりからはねこんで来る雨のしぶきを伸ばした指にうけながら、黒人兵の歌う声のひろがり、その海のように重おもしろく荘重な歌で洗い流された。そして黒人兵が歌い終ると、もう明りとりから雨はしぶきこんでこないのだった。僕らはたえまなく笑っている黒人兵の腕を引いて広場に出た。(p149)

「嘆きと叫びが底にうづくまって」、「重おもしろく荘重な」と二度にわたって黒人の歌への強い関心が示されているが、「荘重」という言葉も子供としての認識とは言えまい。ところで、ここでの歌は次のような黒人霊歌ではないだろうか。

「でもなあ」と、青木がいった。「茅ヶ崎のキャンプも、いまは黒ちゃんや韓国兵が多いってな、夜な夜な望郷の黒人霊歌や、うら悲しい朝鮮民謡の哀調がきこえてくるっていう話だ、戦争はどうでもかまわねえが、おれはあの陽気なキャンプが

なつかしいな、なんてったって朗らかで、わりかた質が良かった」

「じゃ、あそここの米軍は？」訊いたのは萩村だった。

小林が答えた。「出征しちまったってよ、ぜんぶ。いまじや白ちゃんは教官だけだ。友達の話じゃ」（山川方夫『その一年』一九五九（昭和34）年）

『その一年』は『飼育』とはほぼ同時期に発表されたものであり、その現在の状況が反映されていると考えられる。正確な資料が見当たらないので明確には断定できないが、『飼育』が展開する敗戦間際の一九四十年代半ばの時点での日本では、望郷を思わせるような黒人霊歌には誰もが接しにくいのではないか。語っている時点での「僕」（あるいは〈作者〉）の認識が色濃く反映されていると考えたい。

子供が使う言葉ではないことにさらに付け加えれば、「交接」という「意味のことを」（p106）「卑猥なしかし現実感のみちあふれた方言でいった」（p106）や「黒人兵を鼎に引き渡すことになった」という意味のことを書記が方言で説明し」（p150）や「ぼくは坐っている黒人兵の肩を揺すぶり、方言で叫びたてた」（p151）という個所などその言葉をそのまま引用せず語る「僕」が、「方言」であったと第三者（聞き手）に伝えるような述べ方である。

いずれにしても、幾つかの角度からの検討を踏まえれば、敗戦直前と思われる作中の時間から隔たった、『飼育』を語る時点での「僕」の認識を反映した言葉の使用が随所に見られると考えられ

よう。その時点での「僕」の年齢は後にも検討するが、二十代半ばと考えられる。このことを別の角度から捉えれば、語っている時点での「僕」は結末の「弟を捜すために草原をおりて行った」以降の「僕」の出来事を語っていないということになる。このことについては後に改めて論じたい。

二

続いて、「僕」の語りの展開を気早に追えば見落としかねない問題を検討したい。

『飼育』における次のような記述はどのような意味を持つのだろうか。

・ 僕は黒人兵と急激に深く激しい、殆ど《人間的》なきずなで結びついたことに気づくのだった。(p141)

・ 僕と弟は父の《技術》をどんなに誇りに思った事か。：父の馳処理の技術を核にして、僕と弟と黒人兵と父とは一つの家族のように結びついた。(p146)

ここでの《人間的》という言葉については、「深く激しい」という思い込みが記されるが、「黒人兵を動物のように飼う」(p118)としていたうえで使われる「あいつ、人間みたいに」(p141)といった兎唇(以下作中の言葉のままを使う)の言葉が先にあることが見逃せない。ヒューマニティという深い把握ではなく、逆に「きずな」が切れることになる伏線のような表現ではないか。ただ、語っている「僕」が意識的であつたかどうかはともかく、「結びつい

た」という同一の表現が二箇所で見落とせまい。後者の黒人兵を一員とする「家族」という言葉と《人間的》という言葉が結び付き、《人間的な家族》というようになるが、これはいささか《聞き手》に違和感を生じさせないか。「家族のように」というのはその時の「僕」の重い実感であつたのか。ここには「僕」たちの母という存在が語られていないという問題がある。「家族」には通例、母親の存在は欠かせない。ところが、母の不在は「僕」の語りの中で一切言及されていない。「僕」たちの間にはタブーとしてあるのかもしれないと疑い深い《聞き手》なら感じるであろう。

母の不在と父という存在の関係については次のことを視野に入りたい。父に連れられて町に行くときに、「ふだんは決して使わない布の運動靴をはきこ」(p119)むが、それは父が買ってくれたものではないか。なにやら、岡林信康の「チューリップのアップリケ」(71年)にある「早よう帰って来てか／スカートが欲しいさかいに／チューリップのアップリケ／ついたスカート持って来て／お父ちゃんも時々買ってくればるけど／うちやっぱりお母ちゃんに買うてほし」を連想させる。この母親は同和問題とのかかわりで「おじいちゃん」に「怒ら」れ家を出たようである。父が母の代わりをする。さらに、『飼育』の父は「僕らと父自身のために、熱く豊富な雑炊を作る」(p118)という個所があるように、一般的な《母》を代行してもいる。一方で、先に引用した「父の《技術》をどんなに誇りに思った事か」は、通常の典型的な父親の役割として父

性を前面に示すかのように語られている。その点では黒人兵も、「罌の修繕屋のように、技術的に確固としたやりかた」(p140)を見せており父性的な側面もあるのだが、同時に、黒人兵も「優しい動物のように感じられてくる」(p136)というように、「優しい」と、いわゆる〈母性〉を思わせるような側面もうかがえる。「僕」が〈母〉のような存在として「家族」の一員に入れ込んでしまうことはあり得ることだろう。「家族」という言葉は、「啓示」や「莊重」とは異なり、当時の「僕」の〈生〉の感覚を表わすともいえよう。しかし、これも後の展開で黒人兵が一転して敵対する存在になる(母としての面は喪失される)ことへの衝撃を大きくする機能を果たすのではないか。そうだとすれば、黒人兵を母の代替のようにつえているかのように語られた当時の「僕」が痛ましい存在であったようにも読める。

同じような谷間の村を舞台とした同じ〈作者〉の『不意の唾』では、父親・母親という存在について次のように記されている。

・ 集落の長の息子の少年は……。父親は暗い土間に坐って母親と一緒に乾燥した竹の皮をよりわけて小さい束にする仕事をしていた。(p198)

・ 少年はかれを抱きしめている母親が震えはじめるのを感じ、たちまちそれに感染されて自分も身ぶるいを始めた。

しかしかれは母親の腕を自分の体からほどき立ちあがった。

(p208)

前者は農家の日常的な光景の中に父母がいる。後者の引用は集

落の長である父親が米兵に射殺されるという事態が生じ、母子の強い結びつきを示しながらも「少年」が行動を起こそうとする場面である。『飼育』はそういう特別な事情がないとしても母に触れないのは異様であろう。やはりタブーなのではないか。

『不意の唾』での、「かれは母親の腕を自分の体からほどき立ちあがった」という記述を視野に入れて、『飼育』で、置かれている状況に異変を感じ取った黒人兵に「僕」がからめとられて「黒人兵の腕の中でもが」くしかなかった姿と対比すると、母なるものの代理のようにも感じていたであろう「僕」の「黒人兵を友人のように信じていた」ことを「いかに愚かしい事だったか」と「家族」の一員とも捉えた事の虚妄が強く印象付けられるようになる。先に「伏線のように」と述べたことの意味がここにある。

ちなみに、『飼育』とは対照的に妻(場合によっては母)の不在に言及する典型的なものとして、自然主義小説・私小説の系譜に目を通しておこう。

・ お前はもう取返しのかかぬ人の妻だ。その人にこんな手紙を上げるのは、道理から言っても私が間違っている。けれど、私は、まだお前と呼ばずにはゐられない。(近松秋江「別れたる妻に送る手紙」、(一九一〇(明治43)年)

・ これ御覧なさい、此のスマといふのは私の妻です。それが――恥を言はないと分りませんが、此の兒島といふ私の家に置いてゐた學生と、もう一昨年から一緒に姿を隠したのです……」

私は悔しさと嫉しさに身が燃えるやうな心持がしながら

も、…繰返し繰返し禮を言つた。(近松秋江『疑惑』、一九一

三(大正二)年)

・無事に着いた、屹度十日までに間に合せて金を持つて帰るから——という手紙一本あつたきりで其後消息の無い細君のこと、細君のつれて行つた二女のこと、(略)彼は小さな二女ひとり伴れて帰つたきり音沙汰の無い彼の妻を、憎い女だと思わずにいられなかつた。(葛西善藏『子をつれて』、一九一八(大正七)年)

・大十は、三歳になる子供をのこされて、女房に逃げられたものらしかつた。(略)おみのは、太一より、前のわかれた女房に似てゐるやうな氣がしてゐたんだが、(宇野浩二『子を貸し屋』、一九二三(大正12)年)・(引用はいずれも岩波文庫)これらには、妻に去られたという男(夫)の未練が否定できない。無論『飼育』がそのような文学的系譜と無縁であるうが、最初から妻(母)の不在を完全に消しているのはやはり重要な意味があるというべきであらう。

三

「母」の不在だけではなく、「僕」の家族は村の中において、一見すれば気づかされにくいがきわめて異質な存在として語られている。

僕は村の中央にある共同倉庫の二階の、今は使用されない

狭い養蚕部屋に住んでいた。

そこは、

今は村の繭も米も入つていなくてよかつたとか、人々はあちこちで似たことを声高にしゃべり合つてゐるのに、(略)火は映写機を据ゑた入口の方から出たらしく、繭倉の半ばほどはもう屋根も壁も焼け落ちてゐたが、(川端康成『雪国』一九三七(昭和12)年、『現代日本文学大系52』)

というやうな場所であつたようだが養蚕については「昭和32(一九五七)年には昭和初期の最盛期に比べ3分の1以下」という指摘がある(注)。「今は使用されない」のは、こうした事情によるか。しかも、「僕らは家具を何ひとつ持つてゐなかつた」(p106)ともある。「僕ら」は落剥してこの地に流れ着いたと考えられる。

そうした場所に居つくことについては、たとえば有島武郎『カインの末裔』の仁右衛門について、

帳場さんにも川森から話いたはずじやがの。主がの血筋を岩田が跡に入れて貰いたい云うてな。(『有島武郎全集』)

とあるやうな状況だったかもしれない。このことは次のやうな記述からもうかがえよう。『飼育』の冒頭部である。

僕らは火葬場へ死者の骨の残り、胸にかざる記章に使える形の良い骨を探しに來たのだったが、村の子供たちがすっかりそれを採集しつくしてゐて、僕らには何ひとつ手に入らなかつた。

兄弟が、「村の子供たち」に立ち遅れて行動するやうな存在として

語られる、差異化された、よそ者であることを見落としてはなるまい。ただし、

しかし《町》からすっかり隔絶されてしまうことは僕らの村、古いが未成育な開拓村にとって切実な悩みを引き起こしはしなかった。僕ら、村の人間たちは《町》で汚い動物のように嫌がられていたのだし、(p103)

とあるように、村の一員としてすでに馴染んでいるかのようにも見える。だが、次のようなことも見落とせない。

父が帰ってくるのはおそらく夕暮になってからだろう。僕らは自分たちのための食物を探さねばならない。(略)底の浅い鉄鍋に水を汲みこんでから火を焚きつけると、僕らは倉庫の奥の糶殻の中へ腕を突っこんで馬鈴薯を盗む。馬鈴薯は僕らの掌のなかで水に洗われながら石のように固かった。

僕らが短い労働のあと始めた食事は単純だが豊富だった。両手に掴んだ馬鈴薯を幸福な獣のように満足して食べながら……(p11)

村の共有財産である馬鈴薯を盗み、しかも「幸福な獣のように満足して食べ」るのである。これも同じ《作者》の『芽むしり仔撃ち』では感化院の少年たちは、「第三杯の痩せた馬鈴薯と一握りの硬い山塩。僕らは失望しきり、腹をたてていた」という状態にあるが、それよりも悲惨であるともいえる。彼らは村に疫病がはやり始めたかと村人たちが避難した後、村の中で「盗み」、「食物の摘発」を行う。それは置き去りにされたことから来る怒りの反

映でもあるが、大人の不在を突いている。「僕ら」は村人が通常の生活をしている中で盗みを行うかのである。さらには、次のことも視野に入れよう。

・父は黙りこんだままに、僕らの食べている馬鈴薯の鍋を見ただけだった。僕は父が、死ぬほど疲れて苛だっているのだと考えた。子供の僕らには、それをどうすることもできない。「米は無くなったのか」と父が不精髭の荒あらしく伸びひろがっている喉の皮膚を袋のように膨らませて僕を見つめながらいった。

「ああ」と僕は低い声でいった。

「麦も？」と不機嫌に呻くように父がいった。

「なにひとつ無い」と僕は腹を立てていった。(p17)

・僕と弟は父が米と野菜を借りあつて来て、僕らと父自身のために、熱く豊富な雑炊を作るのを待つために……(p118)

この二例目、はたして父は「借り」て来たのか。「僕」は何も感じていないように語られているが、子供の不満を帯びた言葉を受けて父の立場として盗みを働いた可能性を考えることは余計な憶測だろうか。国木田独歩『竹の木戸』には、炭に困った妻が隣家の佐倉炭を少しずつ盗み、それを知った夫は販売店から大胆に一俵丸ごと盗むというエピソードがある。「あつめて」という記述には様々な家から借りて来たというニュアンスがある。父は村の用務を担って街の役場にも行っており、信用の問題として簡単には盗みを働くとは考えにくい、実際に借りたとしても「僕」

は自分がリーダー的存在である子供仲間で屈辱的な思いをしたであろう。父が定着者として農業や林業に従事する（同じような村を舞台とする『不意の唾』では「耕作や蜜蜂の管理や、家畜のための飼料づくり」とある）のではなく、野兎、野鳥、猪を「撃つこと」と、鼬の皮を役場へ渡すことで「生計を支えてい」ることも、流入者であることをうかがわせよう。鼬の皮のことでは、父について行った「僕」が女吏員の枚数記入を「監視した」(p122)とあり、定着者のようにはきちんと扱われない不利益を経験しているということであろうか。宮沢賢治の『なめとこ山の熊』での「豪気な山の中の主の」小十郎が「米などは少しもできず味噌みそもなかったから」「おれはお前の毛皮と、胆きものほかにはなんにもいらない。それも町へ持って行ってひどく高く売れるというのではない」(ちくま文庫)と言うのを想起させるだろう。「僕」たちが村に馴染んでいるとしても、常に生活にぎりぎりの状態で差別されかねないということになる。

「僕ら」が村への流入者であると思われることについてさらに検討を進める。先にも触れた終盤近くの「ぼくはもう子供ではない」という認識の後に、それまでの回想の一端として「兎唇との血まみれの戦、月夜の小鳥狩り、櫓あそび、山犬の仔、それらすべては子供のためのものなのだ」(p162)としていることにも注意したい。「戦」、「小鳥狩り」については何も記されていないが、これは何を意味するのか。兎唇とかかわる展開の中で、
・ 僕の怒りをはねかえすために、頬をこわばらせ口をとがら

せて闘いの姿勢をとり兎唇はいった。(p133)

・ 僕は：兎唇が僕の攻撃に備えて足を開き、戦いの態勢を整えたのも無視して、(p161)

・ 兎唇は軽蔑をあらわにして肩を揺り、勢いよく唾を吐きとばすと、喚きたてながら櫓の仲間へ駆け戻って行った。(p161)などの箇所がある。兎唇との「戦」は複数回にわたって起こりかけたが、完全な決着が着いたわけではないことを示している。想定されるのは、兎唇が村に先から定着していた存在であり、流入してきた「僕」との間に主導権をめぐって「戦」が起こり、ともかくにも村の子供たちの中で自分の位置を確保したということであろう。「僕」が女の子に対して「兎唇が異常な執着をしめす奇妙な遊びにふける自分を夢み」(p113)ることからも兎唇が先住者であることがうかがえよう。現在では共同して、黒人兵への監視という特権で他の子供たちを排除しているのであるが。

後にも検討するが、兎唇は差別されかねない立場にあるということで「僕」と共通する。「僕」は「記章に使う」骨のことで「仲間の誰かを殴りつけて奪わねばならない」(p102)と思い、兎唇は「傲慢な罵声をまじえて子供たちに号令する」(p135)というように、ともに暴力性によつて子供仲間のリーダー格の立場を獲得していることも偶然とは言えないのではないか。

「僕」に関する記述の端々から漏れて来る情報をつなぎ合わせれば、「僕」の一家が流入者であることや差別されかねない特異な状況であることがより鮮明になるだろう。しかし、これらのこと

について、「僕」は〈聞き手〉に一見してすぐそれと分かるように明示的に語っているわけではないのである。それは語る「僕」のプライドであるかもしれない。

四

ところで、食事をめぐっては奇妙ともいえる記述がある。黒人兵に与える食事についてである。

黒人兵の注視の下にある食物籠が僕の興味を急にひき始める。僕は餓えた黒人兵の眼で食物の籠を見ているのだった。大きい数個の握飯、脂の乾くまで焼いた干魚、野菜の煮込、そして切子細工の広口瓶に入った山羊の乳。(略)そして僕は、黒人兵が僕らの提供する夕食の貧しさとは僕らとを軽蔑して、決してその食物には手をつけないのではないかと考えた。羞恥の感情が僕をおそった。黒人兵があくまでも食事にとりかかる意志を示さなかったら、僕の羞恥は父に感染し、父は大人の恥辱にうちひしがれ、やぶれかぶれになって暴れ始め、そして村中が恥に青ざめた大人たちの暴動でみたされるだろう。

(p128)

ここでは「僕ら」自身の食事の貧しさは全く触れられていない。「僕ら」は「脂の乾くまで焼いた干魚」など食することはなかっただろうに。これは後の箇所で「干魚は頭の骨ごと黒人兵の輝くはにかみ砕かれた」(p129)と再び干魚に目を向けていることにも示されている。この食事は雑貨屋の女が持ってきたものであり、お

そらく村の暗黙の合意のものであろう。ところが、「黒人兵の貪婪なむさぼりを見て」「粗末な食物が」「大盤ぶるまいの馳走に変わる」(p130)と捉える。これは盗んだ馬鈴薯を「幸福な獣のように満足して食べ」た自分たちと重ねたからではないか。しかし、「僕」が「黒人兵の眼で」見たことによって、貧しい食事への「僕の羞恥は父に感染し」「村中が恥に」と想像する。貧しい食事に関しての羞恥心は、「僕ら」が村人に対して抱いてもよいはずのものである。それが敵国兵に対する村人共通の「羞恥」にすり替るように述べられている。ここで先に触れた「僕」の靴のことを思い起こそう。町でその「靴をはいた両足を前に尽きだして少女が僕の前を通りすぎるのをまちうけた」際に、「少女は：眉をひそめて駆け出して行った」(p125)ことから「僕は自分がひどくみすばらしく貧しいと考えた」と村人の不在の場所で貧しさを認識させられている。それを痛切に感じるのはこの場面のみである。村にいた時は食事の乏しさなどがあっても、貧しいとは表立っては意識していず、「町」の子供たちを：軽蔑してもいた」にもかかわらず、『町』に住む異性の視線から差別されているという思いに捉えられたからであろう。これは腕力では村の他の子供を圧倒するが、教師や疎開者からは「やぶ呪み」と馬鹿にされる『遅れてきた青年』の「わたし」にも共通する。

差別される立場にあることでは、ここで、兎唇にという存在を検討しておこう。

流行の時疫にふた親みな、くなりしに、欠唇にていと醜かり

ければ、かへりみるものなくほとと饑に迫りしが、(略)その頃イ、ダの君はとおばかりなりしが、あはれがりて物とらせつ。玩の笛ありしを与へて、『これ吹いてみよ、』といえど、欠唇なればえ銜まず。イ、ダの君『あの見るしき口なほして得させよ』とむつかりて止まず。母なる夫人聞きて、幼きもの、心やさしゅういふなればとて医師して縫わせ玉ひぬ。

(『鵬外』『文づかひ』、『鵬外全集』)

とあるように、一般的には差別され、排除される存在である。先に述べたように、その兎唇が子供たち仲間て君臨する存在であり、差別されてもおかしくない位置にいる「僕」と同様である。後に述べるがともに争うべき同年代かそれ以上の「健常者」が登場しないようにあらかじめ設定されているからと言えよう。

また、兎唇については別に注目すべき点がある。

・「あいつ黒人だなあ、俺は始めからそう思っていたんだ」と兎唇は感動に震える声でいった。

・「あいつをどうするんだろう、広場で撃ち殺すのかなあ」

「撃ち殺す?」と驚きに息を弾ませて兎唇が叫んだ。「正真正銘の黒人を撃ち殺す」

「敵だから」と僕は自信なく主張した。

「敵、あいつが敵だって?」と兎唇は僕の胸ぐらを掴み唇の割れめから唾液を僕の顔いちめんに吐きかけながら声を囁れさせて、どなりちらした。(p114 p115)

兎唇は黒人についてなぜこのように考え、親近感だけでなく

「僕」への敵意すら示すのか(捕虜を「広場で撃ち殺す」ようなことは戦争文学ではしばしば見かけるが、「僕」や兎唇がなぜそれを知れるのか。その考察はここでは枠外としておこう)。黒人兵とのかかわりは、ここでも大江の他作品を援用しよう。

そして黒人兵たちが、おなじ有色人種の日本人の青年にたいして示す疑惑はいったんそれに火をつけて敵意にまでもえあがらせると始末におえないことがある。(『戦いの今日』)

これは、進駐する米兵に離脱をそそのかそうと行動する青年の言葉である。兎唇と同様の認識とまでは言えまいが、黒人兵と「有色人種の日本人」の親近性を感じている表れではないだろうか。さらに屈辱的である捕虜となるのは、白人よりは黒人兵が自然だと兎唇が無意識にとらえていたということではないのか。次のようなことも視野に入りたい。

一体黒奴と云ふものは何故、白人種から輕侮、又嫌惡されるのであらう。其の容貌が醜いから黒いからであらうか。單に五十年前は奴隸であつたと云ふのに過ぬのであらうか。(略)此方は唯さへ饒舌な西洋婦人いよく図に乗つて、(略)女は病氣を云立て、是非にも辭職する旨をば、電報で云越した。

何と云ふ我儘……日本人と見て馬鹿にする、と在米日本人の常として、直様な愛国的僻根性を出し沢崎は大に腹を立てたが、(永井荷風『あめりか物語』、一九〇八(明治四二)年)

黒人、白人、日本人の入り混じった複雑な関係はここからもう

かがえよう。

こうしたことを踏まえたうえで、捕虜が黒人兵であることにについて、兎唇の確信と「僕」の自信のなさがきわめて対照的であり、なぜそうなるのかを検討しよう。ここで、兎唇の体の「欠陥」が執拗なまでに記されていることを先の引用部も含め見ておく。

・彼はものものしく力みこんで、割れた唇の間から粘っこい唾液の白くこまかい泡を吹きだしていた。(p109)

・「え？」と唇をひきしめ桃色に光る歯茎を剥き出して兎唇がいった。(p110)

・兎唇は僕の胸ぐらを掴み唇の割れめから唾液を僕の顔いちめに吐きかけながら声を囁れさせて、どなりちらした。

(p115)

「僕」も流入者としての貧しさから差別されかねない状態にあるが、はつきりと目に見えるような形で明らかではない。ここに「障害」が他者の目に明らかである兎唇と「僕」の差を見出すことが出来るよう。兎唇の「障害」についての被差別意識が、無意識であったとしても黒人への親近性を強めるのではないか（ただし、ここでも谷間の村の子供がどうして黒人兵についての情報を得られるのかという問題は残っている。予科練の服装について述べたような「写真で見た」と解するには無理があろう。兎唇が言ったことを〈事実〉として語る以上、その「僕」には介入の余地はない。前に触れたのと同じように〈作者〉の認識にかかわって来るものであり、ここでも再び議論の枠外に置いておきたい）。ま

た、先にも触れたが、『遅れてきた青年』の「わたし」は「やぶ睨み」と教師や疎開者などから差別される存在である。「口惜しさで気絶しそうだった」が「自分の周りにひしめいて罵りつづける子供たちと戦う気持になれないのだ」と思っている。しかし、「戦争がつづいていたら、…僕は勇敢にたちむかつていくのに」という気持ちになる。それが後に言及するが、「英霊を裏切るな!」「我らの軍に参加せよ!」という行動に加わるうとすることになる。差別されることへの抵抗ということでは兎唇の振る舞いを考えるうえで参照できよう。また、三章でも触れた兎唇が「裸の女の子のお尻を掌でひっぱたく」という「陽気な儀式」(p112)を公然と行うことも、差別されることへの露悪的な抵抗感のあらわれではないか。

五

ここで改めて冒頭に述べた、「ぼくはもう子供ではない」に立ち返りたい。四章でも言及した、「僕」を含む年齢の問題も見ておきたい。

『飼育』で「僕らの小学校の分教場は閉鎖され」(p103)とあり、「僕」はその分教場の最年長の位置にあるのかも知れない。先にもふれたが、それ以上の年齢や同じように差別される他の少年たちは不在ではないのか。さらに、何よりも重要なことは、

しかし戦争は、僕らにとって、村の若者の不在、時どき郵便配達夫が届けて来る戦死の通知ということにすぎなかった。

(略) 僕らには、その光輝くたくましい筋肉をあらわにした夏、…それがいつまでも終わりになく続き、決して終わらないように感じられてくるのだった。(107)

ということである。早い段階での言及であり、その後の展開には「村の若者の不在」が背景としてある。このことはのちの展開で言及されることはなく、〈聞き手〉には意識しにくいのが、「僕」と兎唇の放埒とも取れる行動が展開する『飼育』のまっとうな理解のために確認しておく必要がある。

『遅れてきた青年』の「わたし」は「僕」と同じように女教師を醜い存在として捉えている。他にも村の大人が外国兵を殺したことを体験するなど『飼育』と共通する部分もある。その「わたし」は次のようなことに関心を集中する。

わたしは強い兵隊に、熊のような、いかにも農村の出らしい頑丈な兵隊になるために、いつも歩くかわりに走り、教室の掃除のときは軽い椅子のかわりに重い机を動かして体をきたえていた。

そしてある日のこと村へ松根油工場をつくるためにやって来た予科練、写真で見た七ツボタンの紺の服のかわりに黄色の作業服と洗いざらしの戦闘幅の予科練の一人が、わたしに不安の種子をまいたのだ、戦争は終るぞ、きみは幼なすぎて、戦争にまにあわないよ、ぼうや！(略) 女教師は、予科練の青年がわたしの心にうがった暗い不安の穴ほこについてなにも知らない。

『飼育』では戦争について「戦争は、…戦死の通知ということにすぎなかった」といったん後景に退いていたが、その後の展開を経て、「急に村は戦争におおいつくされ」、「そのあけく終わりが近いようだがな」と書記は…となる(163)。「飼育」で「僕」が最終的に迎える時点は『遅れてきた青年』の主人公が思い切った行動に出る直前のような位置にあるように見える。

「わたし」は、立てこもっているとされる兵隊の「戦友を裏切るな、英霊を裏切るな！…我らの軍に参加せよ！戦争はこれから始まる！」というビラに触発され、手に入れた米軍の自動小銃を持ち出したが警察にとらわれ、救護院に入れられる。その際に、医者（ママ）の鏡から反映したわたし自身の眼を見たのだ。(略)しかしその穢らしい眼は、子供の眼ではなかった、わたしの眼ではなかった、誰かかつてのわたしでなく子供でもないもの

と考える。「子供でもない」とあるが冒頭に記した「ぼくはもう子供ではない、という考えが啓示のように僕をみたした」というものと無縁とは言えない。また、救護院で「村で戦争中にアメリカ兵を叩き殺した」ことなど「村の大人どもの嘘を暴露する文章を書こうとして夢中になった」ことも『飼育』での「僕の屈辱を見まもり、じつとして大人たちへの敵意」と同質のものともまでは言えないが、「わたし」も差別されるような存在であったことも両者を対比するうえで、視野に入れておいてよいだろう。

『飼育』の展開の全体を通して「ぼくはもう子供ではない」とい

う認識に至った経緯を押さえておこう。一見するだけでは定かには掴めないが、徐々に終盤へと布置されていることが確認できよう。黒人兵に対する「僕」の認識の変化と、同じように大人たちへの認識の変化がその根底にあると考えられる。いささか長くなるが、その経過を順を追って引用したい。

PI20 そこから黒人兵の腕が差し出され僕を掴まえに来る。PI21 黒人兵が地下倉から出て、村の人間や猟犬をみな殺しにし、家に火をつけてしまう。僕は体が震えるほど恐く、それについて考えたくなかった。PI27 僕の頑丈で褐色の両脚が震えるPI30 僕は黒人兵の低く厚ぼったいしわぶきを聞いたのだ。僕は足を踏みはずし、体中の皮膚がおびえから鳥肌になってしまったのを感じた。PI36 額を鍋の上へ傾けている黒人の太い首筋の細かい震えや、筋肉の突然の緊張と弛緩を見おろしていると、僕には黒人兵が柔順でおとなしく、優しい動物のように感じられてくるのだった。(略)しかし、黒人兵の体がどうかするはずみにかしき、その足首にからみついた猪鬣の鎖が金属質の硬い音をたてると、僕は激しい勢でおびえが回復し、僕の血管のすみずみになだれこんで、あらゆる皮膚を鳥肌だたせるのを感じるのだ。PI39 膝をかかえこんで地下倉の床に坐り黙っているのだから、猪鬣を取りのぞいたところで、僕らにどんな危害を加え得よう? 一匹の黒人にすぎないのだから。(略)猪鬣を外した時、黒人兵は急に呻くような声をあげて立ちあがり、足をばたばたさせた。兎唇は恐怖に涙を流しながら

ら猪鬣を壁に放りつけ階段を逃げ上って行ったが、僕と弟は立ちあがることさえできず、体をしめつけあうだけなのだ。僕と弟を突然回復した黒人兵への恐怖が息もたえだえにする。しかし、黒人兵は驚るように僕らへ掴みかかって来るかわりに、(略)どんよりした涙と脂に濡れた眼を壁の根に落ちている猪鬣にそそいでいた。兎唇が恥にうなだれて地下倉へ戻って来た時、僕と弟は彼を優しい微笑でむかえた。黒人兵は家畜のようにおとなしい……PI41 黒人兵の黄色く汚れてきた大きい歯が剥き出され頬がゆるむと、僕らは衝撃のように黒人兵も笑うということを知ったのだ。そして僕らは黒人兵と急激に深く激しい、殆ど《人間的》なきずなで結びついたことに気づくのだった。父の馳処理の技術を核にして、僕と弟と黒人兵と父とは一つの家族のように結びついた。PI48 僕らがいかに黒人兵を愛していたか、PI52 急激に僕は、黒人兵が捕えられて来た時と同じように、理解を拒む黒い野獣、危険な毒性をもつ物質に変化していることに気づいたのだ。(略)黒人兵は《敵》に変身し、

先に見た、「家族のように結びついた」も含んでいる。黒人兵に対する強い親近感を含めながら様々な経緯を経て、最終的に黒人兵が《敵》に変身し」たと認識することになる。大人たちに対する「親しみ」が「敵意」へと変貌するのも同様の展開である。

PI55 数かずの眼が兎のようにつりさげられている僕の恥辱を

見つめた。P156 僕は大人たちに親しみと愛とを回復した。P157 僕の屈辱を見まもり、じっとしている大人たちへの敵意、P158 あらゆる大人たちが僕には我慢できないのだった。P159 大人たちが、僕の寝ているあいだに、すっかり別の怪物に変わってしまったようだった。

黒人兵と大人という「僕」がかかわる二つの軸が相似をなして「ぼくはもう子供ではない」という展開を作り出しているのである。もう一つ、これまで検討してきたように「僕」という存在にとって兎唇という存在も重要であるが、「ぼくはもう子供ではない」の直後にその根拠の一つとして三章で触れた「兎唇との血まみれの戦」は「子供のためのもの」だと忘却されるべきものとして挙げており、これも「僕」の〈成長〉を側面から照射するものとしてあろう。

六

最後に末尾の記述に触れたい。

僕は唐突な死、死者の表情、ある時には哀しみのそれ、ある時には微笑み、それらに急速に慣れてきていた。村の大人たちがそれらに慣れているように。(p165)

ここの『飼育』の本文をめぐってかつて奇妙なことがあった。これは、昭和四十四年十一月の新潮文庫十五刷のものでは「村の大人」ではなく「町の大人」になっていた。遠い日の研究会の席上、

私はこの「町」について違和感を覚えると述べたところ、他の参加者が腑に落ちないという顔をした。その人たちの私のものよりも新しい日付の新潮文庫では、「村」となっていたからである。なぜこのようなことが起こったのか。「町」と「村」なので誤植の問題ではない。当初は〈作者〉のケアレスマスがそのまま初出誌に残され、それを新潮文庫が引き継ぎ、多くの読者の目に触れて、訂正されたものかと考えていた。ところがこの度、初出の『文學界』で確認したところ、「村の大人たち」と正しい形であった。となれば、推測できるのは、新潮文庫の編集者が、「書記は火葬されるだろう」について、村には「仮設火葬場」しかなく、洪水で遮断されていない時には『町』の火葬場が使われていることから、町の書記は「黒人兵を焼くために集められた薪」であっても「馴れている」「町の大人」によって、そこで火葬されるべきと判断したということではないのか(『飼育』の本文には本来「町の大人」という言葉はなく、「僕」が町に行った時の「暗い店の奥から僕らを見守る大人たち」があるだけである。ちなみに「村の大人(たち)」は本文中に二十回使われているのである。『町』の子供については、「陰険」などと三か所に言及がある)。新潮文庫の編集者は全体の展開を踏まえない判断で「町の大人」に「訂正」したのではなかったか。

『飼育』は一章の冒頭で触れた「ぼくはもう子供ではない、という考えが啓示のように僕をみたした」「僕」が周りの状況に「急速に慣れた」うえで「弟を探すために草原をおりて行った」で閉じ

られ、それ以後のことは語られない。(成長)の物語は閉じられる。『遅れてきた青年』では「わたし」は、その後東大に進学し、政治活動に巻き込まれたり、政治家に接近することになる。『飼育』の「僕」とは程遠いように見えるが、あるいはその後の極端な可能性の一つとして捉えることもできようか。

『飼育』と同じような発表時期の作品で、戦争にかかわるものは、山川方夫の『夏の葬列』(一九六二(昭和37)年)のように、戦時から時間がたち、その当時の回想を含んで現在の視点で描かれているものもあれば、島尾敏雄『出発は遂に訪れず』(一九六二(昭和37)年)のように、敗戦時で作品が閉じられるものもある。一章の終わり近くで、語っている時点での「僕」の年齢は二十代半ばと推定することが出来」と指摘した。語られている時間と語っている時間の間の空白の時間を考慮したものである。その『飼育』はもちろん後者であり、『遅れてきた青年』は前者である。

注

「戦争による労働力の不足と戦中・戦後の食糧難によって桑田は田畑に転換され、大きな打撃を受けた養蚕業は、昭和22(一九四七)年の繭生産量が53万トンにまで激減した。その後、戦後の蚕糸業復興政策によって昭和32(一九五七)年には12万トン弱にまで回復したものの昭和初期の最盛期に比べ3分の1以下にとどまり、」(村上毅「我が国養蚕業の歴史と近代化過程における役割」)

(いずはら・たかとし 本学名誉教授)